

病

正岡子規

青空文庫

○明治廿八年五月大連灣より帰りの船の中で、何だか勞つかれたようであつたから下等室で寝て居たらば、鰯ふかが居る、早く来いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰たんが出たから船端の水の流れて居る処へ何心なく吐くと痰ではなかつた、血であつた。それに驚いて、鰯を一目見るや否や梯子はしごを下りて来て、自分の行李こうりから用意の薬を取り出し、それを袋のままを着て居る外套がいとうのカクシへ押し込んで、そうして自分の座に歸つて静かに寝て居た。自分の座というのは自分が足を伸ばして寝るだけの広さで、同業の新聞記者が十一人頭を並べて居る。自分らの頭の上は仮の棧敷さじきで、そこには大尉以下の人が二、三十人、いつも大声で戦いくさの話か何かして居る。その棧敷さじきというのは固より低いもので、下に居る自分らがようよう坐れる位のものだから、呼吸器の病に罹かかつて居る自分は非常に陰氣に窮屈に感ぜられる。血を略はく事よりもこの天井の低い事が一番いやであつた。この船には医者は一人居たがコレラの薬の外に薬はないそうだ。固より病人の手あてなどしてくれる船ではないから、時々カクシの薬を引き出しては独り呑んで見るけれど、血はやはりとまらぬ。もつとも着物は洋服一枚着たきりで日本服などはない、外套がいとうも引つかけたままで寝て居るのである。航海中の無聊ぶりようは誰も知つて居るが、

自分のは無聊に心配が加わつて居るので、ただ早く日本へ着けば善いと思うばかりで、永き夜の暮し方に困つた。時々上の棧敷で茶をこぼす、それが板の隙間すきまから漏りて下に寝て居る人の頭の辺へポチポチと落ちて来る、下の人が大きな声で、何かこぼれますよ、と怒つたようにいう、上の人が、アアそうですか失敬失敬、などという。こんな問答でもあるとその間だけ気が紛れて居るが、そんな事も度々はない。退屈の余り凱旋がいせんの七絶が出来たので、上の棧敷の板裏へ書きつけて見たが、手はだるし、胸は苦しし遂に結句だけ書かずにした。その内にも船はとまって居るでもないからその次の日であつたかまた次の日であつたのか午前に日本の見えるという処まで来た。日本が見える、青い山が見える。という喜ばしげな声は処々で人々の口より聞えた。寝て居る自分もこの声を聞いて思わずほほ笑んだ。午後には馬関にはいつた。この時室内を見まわして見ると、五、六十人も居る広い室内に残つて居る者は自分一人であつた。自分も非常に嬉しかったから、そろそろと甲板へ出た。甲板は人だらけだ。前には九州の青い山が手の届くほど近くにある。その山の緑が美しいと来たら、今まで元山はげやまばかり見て居た目には、日本の山は緑青ろくしょうで塗つたのかと思われた。ここで檢疫があるのでこの夜は碇泊した。その夜の話は皆上陸後の希望ばかりで、長く戦地に居た人は、早く日本の肴さかなが喰いたい、早く日本の蒲団に寝た

い、などといつて居る。早く妻君の顔が見たいと思うて居るのも二人や三人はあるらしい。翌日は彦島^{ひこしま}へ上つて風呂にはいった。着物も消毒してもろうた。この日は快晴であつたが、山の色は奇麗なり、始めて白い砂の上を歩^{ある}行いたので、自分は病氣の事を忘れるほど愉快であつた。愉快だ愉快だと、いわぬ者は一人もない。中にはこのきたない船にコレラのなかつたのは不思議だ、などというて喜んで居る者もある。しかしこの喜びと愉快が三時間とは続かなんだ。三、四艘の舢^{はしけ}は我々を載せて前後して本船に帰つてから、まだ幾分時もたたぬに、何やら船中に事が起つたらしい。甲板を走る靴の音は忙しくなつて、人々の言い罵^{ののし}る声が聞える。あるいは誰かが誤つて海中へ落ち込んだでもあろうか、など想像して居る中に、甲板から下りて来た人が、驚くべき報知を持ち来した。それは、この船に乗つて居た軍夫が只今コレラで死んだ、という事であつた。これを聞くと自分の胸は非常な動悸^{どうき}を打ち始めて容易に静まらぬ。周囲は忽ちコレラの話となつてしもうた。ただこの後の処分がどうであらうという心配が皆を悩まして居る内に一週間停船の命令は下つた。再び鼎^{かなえ}の沸くが如くに騒ぎ出した。終に記者と士官とが相談して二、三人ずつの総代を出して船長を責める事になった。自分も気が氣でないので寐ても居られぬから弥次馬^{やじうま}でついて往た。船長と事務長とをさんざん窮迫したけれど既往の事は仕方がない。何でも人夫ど

もに水を飲ませるのが悪いというので、水瓶の処へ番兵を立てる事になった。自分は足がガクガクするように感ぜられて、室に帰って寝ると、やがて足は氷の如く冷えてしまった。これは先刻風呂に這入った反動が来たのであるけれど、時機が時機であるから、もしやコレが伝染したのであるまいかという心配は非常であつた。この梅干船（この船は賄が悪いのでこの仇名^{あだな}を得て居た）が我最期の場所かと思うと恐しく悲しくなつて一分間も心の静まるという事はない。しかし郵便を出してくれると聞いて、自分も起き直つて、ようよう硯^{すずり}など取り出し、東京へやる電報を手紙の中へ封じてある人に頼んでやった。こういう際には電報をやるだけでもいくらかの心やりになるものだ。この夜また検疫官が来て、下痢症のものは悉く上陸^{ことごと}させるというので同行者中にも一人上つた者があつた。自分も上陸したくてたまらるので同行の人が周旋してくれたが検疫官はどうしても許さぬ。自分の病気の軽くない事は認めて居るが下痢症でない者を上陸させろという命令がないから仕方がないという事であつた。如何にも不親切な、臨機の処置を知らぬ検疫官だと思つて少しは恨んで見た。しかし今は平和の時でないのだから余り卑怯^{ひきよう}な事はいうまい位の覚悟は初めからして居る。そう思うて自分はあきらめた。けれどもつくづくと考えて見るとまた思い乱れてくる。平生の志の百分の一も仕遂^{しと}げる事が出来ずに空しく壇^{だん}の浦^{うら}のほとりに水葬

せられて平家蟹へいけがにの餌食えじきとなるのだと思うと如何にも残念でたまらぬ。この夜から咯血かつけつの度は一層烈はげしくなつた。固より船中の事で血を吐き出す器もないから出るだけの血は尽ことごとく呑み込んでしまわねばならぬ。これもいやな思ひの一つであつた。夜が明けても船の中は甚だ静かで人の気は一般に沈んで居る。時々アーアーという歎声を漏もらす人もある。一週間の碇泊とは随分長い感じがする。甲板から歸つて来た人が、大山大將を載せた船は今宇品うしなへ向けて出帆した、と告げた時は誰も皆妬ねたましく感じたらしい。この船は我船より後おくれて馬関へはいつたのである。殊に第二軍司令部附であつた記者は、大山大將が一処に歸るといわれたのを聴かずに先へ歸つて来て実にいまましい訳だ、と悔くやんで居た。乗合一同皆思案にくれて居る中、午後四時頃になつて一道の光明は忽たちまち暗中に輝いて見えた。それは、上陸の許否は分らぬがとにかく、和田の岬の檢疫所へ行く事を許されたという事であつた。上陸せんまでも、泊つて居るよりは動いて居る方が善いというのは船中の輿論よろんである。船は日の暮に出帆した。非常にのろい速力でゆつくりと行たので翌日の午後ようやに漸く和田の岬へ著いた。上陸が出来るか出来んかと皆固唾かたずを呑んで待つて居たがこの日は上陸が出来ずに暮れてしもうた。翌日の十時頃に上陸の事にきまつたので一同は愁眉しゅうびを開いた。殊に荷物を皆持つて上れという命令があつたので多分放免になるのであらうと勇みに勇ん

で上陸した。湯に入つて（自分は拭いただけで）折詰の御馳走を喰うて、珍しく畳の上に
寐て待つて居ると午後三時頃に万歳万歳、という声が家を揺かして響いた。これは放免に
なつた歓びの叫びであつた。この時の嬉しさは到底いう事も出来ぬ。自分は人力車で神戸
の病院へ行くつもりであつたから、肩には革包をかけ、右の手にはかなり重い行李を提げ、
左の手は刀を杖について、喘ぎ喘ぎそろそろと歩行いて見たが、歩行くたびに血を略くの
で、砂の上へ行李を卸して腰かけて休んで居た。声を揚げて人を呼ぶ気力も最うない。折
よく連の人が来たので、自分の容態を話し、とても人力には乗れぬから釣台を周旋して
くれまいかと頼んだ。その人は快く承諾して、他の連と相談した上で一人を介抱のため
に残して置いて出て往た。このさいに自分が同行者の親切なる介抱と周旋とを受けた事は
深く肝に銘じて忘れぬ。二時間ばかり待つてようよう釣台が来てそれに載せられて検疫所
を出た。釣台には油単が掛つて居て何も見えぬけれども人の騒ぐ音で町へ這入つた事は分
る。殊に往来の多いのと太鼓などの鳴つて居るのとで考えると土地の祭礼であるという事
も分つた。上陸した嬉しさと歩行く事も出来ぬ悲しさとで今まで煩悶して居た頭脳は、
祭礼の中を釣台で通るといふコントラストに逢うてまた一層煩悶の度を高めた。丁度灯と
もし頃神戸病院へ著いた。入院の手続は連の人が既にしてくれたので直に二階のある一室

へ這入った。二等室というので余り広くはないが白壁は奇麗きれいで天井は二間ほどの高さもある。三尺ばかりの高さほかない船室に寝て居た身はここへ来て非常の愉快を感じた。殊に既往一ヶ月余り、地べたの上へ黍稗むぎわらを敷いて寝たり、石の上、板の上へ毛布一枚で寝たりという境涯であつた者が、俄にわかに、蒲団や藁蒲団の二、三枚も重ねた寐台の上に寝た時は、まるで極楽へ来たような心持で、これなら死んでも善いと思うた。しかし入院後一日一日と病は募つりて後には咯血に咽むせるほどになつてからはまた死にたくないのよいよい心細くなつて来た。やがて虚子が京都から来る、叔父が国から来る、危篤きしやくの電報に接して母と碧梧桐へきごとうとが東京から来る、という騒ぎになつた。これが自分の病氣のそもそもの発端である。

〔『ホトトギス』第三卷第三号 明治32・12・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二巻」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三巻第三号」

1899（明治32）年12月10日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年8月4日作成

2011年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

病

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>